

## 四国遍路の形成をどう読み解くか —長谷川賢二氏の講演によせて—

川岡 勉（愛媛大学教育学部教授）

**An analysis on the formation of the Shikoku henro based on the presentation**

**by Kenji Hasegawa**

**Tutomu KAWAOKA**

**Professor, Faculty of Education, Ehime University**

長谷川賢二氏の講演「中世の四国辺路と修験道・山伏—四国遍路形成史をめぐる一視点一」は、氏自ら切り開いてこられた修験道・山伏研究の成果を踏まえて、四国遍路の形成過程を解明しようとする意欲的なものであった。

四国遍路と言えば、一般に弘法大師空海の巡り歩いた跡を巡拝するものとされ、大師信仰から説明する見方が広く通用している。また、近年は四国遍路と熊野信仰・熊野修験との関係にも注目が集まっている。これに対し長谷川氏は、中世の四国辺地・四国辺路が大師信仰に還元されるものではないことを丁寧な史料分析から明らかにした上で、四国における聖の辺地修行から説き起こして四国遍路の源流を探る。そして、中世の四国辺路が、山伏すなわち山籠修行に特化した聖たちの修行体系に組み込まれていたことを重視し、彼ら山伏の主体的な活動や地域的結合が後の四国遍路を生み出す基盤になったことを指摘する。そこには熊野信仰との接点も見られるものの、何よりも山林斗藪や宿の設定など、山伏の修行のあり方から四国遍路形成への道筋が展望されるのである。四国遍路の形成プロセスには不明な部分が多いが、まず山伏の辺路修行を中核にすえて議論すべきだというのが長谷川氏の主張の結論であった。

長谷川氏は、聖による四国辺地→山伏の四国辺路→四国遍路の形成へという段階的変遷を提示する。古代末・中世初期の辺地修行から四国遍路の形成へとストレートに結びつけるのではなく、四国辺路を「修験之習」（修験者が究めるべき修行内容・しきたり）に組み込んだ山伏の活動やネットワークを媒介にすることで、四国遍路の形成を読み解こうとするのが長谷川説の特徴である。

氏の言うように、中世の四国辺路が、辺地修行（海岸巡りの修行）を継続させつつ、山伏の修行体系に組み込まれていたことは確実である。鎌倉時代の仏名院所司目安案（『醍醐寺文書』）に「修験之習、以両山斗藪、瀧山千日、坐巖屈冬籠、四国辺路、三十三所諸国巡礼、遂其芸」とあるように、四国辺路は三十三所観音巡礼とともに、大峯・葛木両峯斗藪や瀧山千日などと並ぶ「修験之習」の一つとして列挙されている。長谷川氏が紹介した八菅神社所蔵碑伝や勸善寺所蔵大般若経奥書などからも、熊野の修験者が四国辺路に取り組んでいたことは明らかである。

安芸大願寺の僧侶である尊海が筆録した天文10年『大藏経目録口書写』（大願寺文書）には、夢の中に現われた厳島大明神の靈験が述べられた上で、「如此新成儀書付置候事、於虚言者、尊海六十六部・東西秩父順礼・四国遍路・三禪定墮成就、空捨仏種、阿鼻城為家者也」と記されており、四国辺路が六十六部廻国巡礼や東西秩父觀音順礼・三禪定（富士山・白山・立山巡拝）と並ぶ修行と把握されている。大願寺は厳島神社の本願であり、同社の造営を担当する勸進聖の活動拠点であった。そして、本願は聖・山伏のネットワークとも深い結びつきを有することが指摘されている。中世末に至るまで、四国辺路は六十六部・觀音巡礼・三禪定などと並んで往生の機縁となる修行と位置づけられていたのである。

本来、急峻嶮岨な山岳や岩場を修行場としていた山伏が、海岸沿いを巡る辺地修行をはじめ、ルーツの異なる各種の難行・苦行を包摂して修行体系を肥大化させていくのは何故か、そのメカニズムはどのようなものであったか、長谷川氏に対してもう少し説明を求めたいところである。

もちろん、山伏の修行体系の中に四国辺路が組み込まれたからといって、四国修行が山伏の独占物になつたわけではなかろう。しかし、長谷川氏は四国を修行の地とした聖群の中でも、とりわけ山伏に关心を寄せる。その理由は、山伏による四国修行が後の四国遍路の形成に結びつく基盤になったとする見通しを立てているからである。

それでは、何をもって「四国遍路の形成」と捉えればよいのであろうか。氏が四国遍路の主たる要素とし

て挙げているのは、①弘法大師信仰、②巡り（巡礼者の行動様式）、③八十八か所の霊場ネットワークである。山伏たちの活動や横断的結合を介在させることで四国遍路の形成を読み解こうとするのであれば、この3つの要素が山伏の修行体系の中に萌芽的にせよ見出せるかどうかが問題になってくる。

弘法大師信仰と山伏との関わりは判然としない。長谷川氏が指摘するように、弘法大師の聖跡を巡る動きは中世の段階である程度みられるものの、なお限定的であるし、高越寺など四国遍路の札所に結びつかない聖跡もある。但し、弘法大師信仰が一定の広がりをみせていたとすれば、山伏は大師信仰を持ち出すことによって民衆を四国遍路に誘引していったのかもしれない。圭室文雄氏によって、戦国期における高野山への参詣が本山修験の山伏を介してなされる事例があったことも明らかにされており、山伏と弘法大師信仰の関係については今後の検討課題となろう。

霊場を巡るという行動様式については、長谷川氏は山伏の修行形態が山籠から斗藪へと転換すること、これと並行して行場が整備され宿が成立することとの関連性を示唆する。四国遍路の札所巡拝方式が山伏の行場巡拝の作法の中から生み出されるという推論をもとに、行場における宿が札所の源流（「原札所」）と位置づけられるのである。この仮説は興味深いが、巡礼行為自体は修験道が成立する以前から広く中世の寺社勢力に共通して見出される宗教実践であり、そこには各地の聖地巡拝が含まれていたとみるべきではあるまい。例えば、遊行聖として知られる一遍が参籠した菅生の岩屋は、当時から「観音影現の靈地、仙人練行の古跡」、「大師練行の古跡」だったのであり、一遍はその後も諸国一宮や国分寺に代表される寺社や廟所など、各地の宗教的な中心地に立ち寄っている。辺地修行の段階以来、四国は宗派や寺社の所属を超えて漂泊・遍歴する聖の修行地であり、その段階から既に聖地・霊場・古跡などをたどっていた可能性は高いようと思われる。そうだとすれば、中世の四国辺路が山伏の修行体系に組み込まれたからと言って、札所巡拝が山伏の行場巡拝に起源を持つと考えなくてもよいのではないだろうか。これは、三十三所巡礼や六十六部巡礼についても同じことが言えよう。

八十八か所の霊場ネットワークについても、長谷川氏はそれが寺院や宗派を超えた山伏の横断的結合を土台に形成されたと論じる。しかし、そもそも札所寺院のネットワークというものが本当に実在したかが、まず問題になる。同じ巡礼でも、観音巡礼の場合は三十三カ所の札所間ネットワークの成立を想定しやすいのに対し、巡礼先が固定せず巡礼者の随意（自由な選択）に委ねられる六十六部巡礼などでは巡礼先のネットワークは想定しがたい。四国遍路の場合、確かに近世初期に八十八か所に札所が固定するものの、なお流動性を残しており、札所寺院のネットワークの成立は自明とは言えない。むしろ、四国遍路では霊場ネットワークというようなものは、つい最近まで存在しなかったとみることもできるように思われる。長谷川氏の説くように、四国辺地・四国辺路が聖や山伏などの苛酷な修行として取り組まれ、そうした巡礼者の主体的な活動が四国遍路の形成につながるのだとすれば、札所寺院を結びつけたのは巡礼者の巡拝行動そのものであり、巡礼者を受け入れる札所寺院の間に相互のネットワークという要素は乏しかったのではなかろうか。四国遍路の構成要素として挙げるのであれば、霊場ネットワークという表現ではなく、巡礼地の固定化という表現を用いた方がよかったように思われる。

また、かりに霊場ネットワークの存在を認めるとしても、それが山伏の横断的結合とどのように関係するかも問題となる。長谷川氏は、阿波において19の寺坊による理念的な一国規模の結合組織が形成されるなど、中世には山伏の地域的結合が存在していたことを明らかにした。氏はそこに宗派的秩序や本末関係を超える結合を見出し、それが霊場ネットワークの地盤を形成したと指摘する。重要な問題提起ではあるが、地盤形成とは具体的に何を意味するのか明確ではないし、四国遍路の形成を在地の動きから説明するだけでよいのかという疑問も持つ。宗派や寺社の所属を超えた巡礼という点も、既に辺地修行の段階で見出されるのではなかろうか。どのようにして八十八か所が選定され、札所が固定化していくのか、さらなる追究が求められていよう。

このほか、四国遍路に俗人の参加が見られるようになることの意味や、山伏のネットワークとそれを上から組織する動きとの関係など、長谷川氏に聞いてみたいことは少なくない。中世末期から近世初期にかけて、人々の宗教への期待や関心が大きく膨らんで宗教的な熱狂が高まったとする見方が存在する。廻国聖の活動や寺社参詣・寺社造営が活発化し、一向一揆や法華一揆・キリスト教の広がりも顕著である。民衆が四国遍路に加わっていく動きも、顕密体制の衰退期に廣くみられた一連の宗教事象との関係に留意しながら読み解

いていく必要があろう。

また、山伏のネットワークが拡大し、地域社会の宗教秩序に大きな影響を及ぼすようになると、世俗権力・地域権力との接点が生じる。幕府や守護は山伏に対して、公事の徵収を請け負わせたり、諸国の動静を探らせてスパイ活動に当たらせたりすることもあった。これに対して、長谷川氏の議論は、何よりも山伏の側の自律性・下からの運動という面を重視するように見受けられるが、山伏の結合組織のあり方には一定の地域差も認められるようである。そうした差異を超えて、四国遍路が形成されていくプロセスについてはまだまだ分からぬことが多い。

中世の四国辺路が山伏の修行体系に組み込まれ、多く山伏に担われるようになることは長谷川氏の議論で明らかになった。しかし、だからといって四国遍路の形成につながる諸要素を総て山伏の行動様式や習俗から説明すべきだということにはならないようと思われる。山伏の修行体系との関連性に留意しつつ、しかも山伏の活動形態に収斂させることなく読み解いていく視点が必要ではないだろうか。四国遍路は宗派も信仰内容も札所の立地も複合的であるだけに、長谷川氏の問題提起を踏まえて、多様な角度から議論を深めていくことが求められるのである。

### 【参考文献】

榎原雅治『日本中世地域社会の構造』(校倉書房、2000年)

工藤克洋「戦国時代の勧進聖と在地の聖・山伏」(『大谷大学史学論究』18、2013年)

圭室文雄「高野山信仰の展開」(孝本貢・圭室文雄・根本誠二・林雅彦『日本における民衆と宗教』 雄山閣出版、1994年)

長谷川賢二「四国遍路の形成と山伏の関係をめぐる覚書」(『瀬戸内海地域史研究』8、2000年)

長谷川賢二「修驗道組織の形成と地域社会」(岩田書院、2016年)

長谷川賢二「中世の四国辺路と宿一四国八十八か所の前史をめぐる仮説」『徳島県立博物館ニュース』 104、2016年)



長谷川賢二氏講演



シンポジウム（パネラー：守田逸人氏、川岡勉氏、長谷川賢二氏／司会：胡光）